

フランス文学に描かれた狂気

篠田 知和基

フランスの幻想文学には「狂気」をとりあつかったものが多い。しかし、幻想文学が一九世紀前半に成立する以前から、フランスの文学では「狂気」がしきりにとりあげられる。中世文学でも「トリスタンとイゾー」では、狂人をよそおうトリスタンの佯狂がえがかれる。あるいは「悪魔のロベール」では犬と寝食をとにもする犬憑きとみなされる症状がえがかれる。そして聖杯伝説では、聖杯からとおざけられたベルスヴァルやランスロが狂って森をさまようさまがえがかれる。「アマダスとイドワンヌ」では恋する女から遠ざけられたアマダスが狂って裸になってかけまわる。

「悪魔のロベール」

中世の伝説。あらゆるもののロベールは狩りをこのんで殺生にあけくれる。そんなある日、ひたいに十字架をつけた鹿を射

殺した。鹿はロベールにむかって「おまえは父親と母親をこそすだろう」と予言する。城へかえったロベールは夫婦のベッドに男女がだきあつて寝ているのを見て、奥方と間男だとばかりおもつて二人を剣でさしこす。ふたりは、実は彼をたずねてきた両親だった。奥方が、疲れ切ったふたりを夫婦の寝台にやすませていたのだ。真実を知ったロベールはただちに贖罪の旅にでる。ローマについたかれは、とある隠者に苦行を命じられる。ひとことも口をきかずに、犬と一緒に寝、犬と一緒に餌をもらつてたべるのだ。彼はいわれたとおりにした。生肉をほおつてもらうと犬と一緒にそれをうばいあつてむさぼりくつた。皇帝はそれを見ておもしろい「狂人」だともい、「道化」としてなぐさみものにする。犬と同じ生活をするということは、狼になつたとおもつて狼のような行動をする狼憑き（リカントロピー）とおなじもので、ここでは「犬憑き」だった。そこへトルコ軍が攻めてくる。帝国の運命は風前のともしびとなる。皇帝は全軍をひきいて戦場へおもむいた。その間に天使がロベールにあらわれて鎧兜と馬をあたえ、戦場へゆくように命じた。彼はひとりで敵陣にのりこみ獅子奮迅の働きをして敵をおいはらう。なんとかそれが繰り返された。宮殿に帰るとすぐに鎧兜をぬぎ、犬小屋にもぐりこんでいたので、だれもその奇跡の騎士がロベールであるとは気がつかなかった。ただひとり皇帝の娘が一部始終をみていた。彼女はうまれついでの聾啞者だった。

奇跡の騎士をめぐる詮議の場に彼女は登場するとうまれてはじめて口をきいた。奇跡の騎士とは犬のロベールそのひとである。わたしはすべてをみていたと。

十九世紀幻想文学

十九世紀になるとフランス文学はイギリスやドイツの影響をうけながら、独自の幻想文学をつくりあげてゆく。そのさきがけはノデイエである。かれは「青靴下のフランソワ」「バチスト・モントーバン」「パンくずの妖精」などで温和な狂気を描いた。「バチスト・モントーバン」は城の令嬢に恋したバチストが身分違いの恋をとがめられて、城からおいはらわれたあと、人語を解さない痴呆状態におちいって、鳥たちとだけ話をかわすようになった話で、失語症の痴呆だが、作者は狂気 (folie) といっている。「パンくずの妖精」では教会のポーチにねとまりしている乞食の老婆としたしくなった大工のミッシェルが、老婆の話を真に受けて彼女を二〇〇〇年まえのシバの女王そのひとだと信じこんでしまう「狂気」がえがかれる。彼にとつては、乞食の老婆は夜になるとうつくしい女王ベルキスに変容するのだ。しかしあるときベルキスは言う。自分はまもなく死ななければならぬ。ただ、「歌うたうマンドラゴラ」を摘んできてくれたら永遠に生きていけることができる。ミッシェルは

それをきいて「歌うたうマンドラゴラ」をさがしにでかける。老婆が永遠の美女であるというのはミッシェルだけの思い込みである。「歌うたうマンドラゴラ」がどこかに咲いているというのも妄想であり、だれもがそんなことはありえないと云うだろう。しかしミッシェルはそれをかたく信じている。

ネルヴァルの狂気

ノデイエは狂人の物語をそのほか「スマラ」などにも描いたが、彼自身はアルスナル図書館の館長として社会的責務をはたしていた人間で、多少、奇矯なところはあったが、常識の範囲内にどまっていた。それにたいしてネルヴァルは一八四一年に発作をおこして病院に収容され、その後、入院をくりかえしながら、なかば放浪の生活をおくりつつ、狂気のうちに首をつって死んだ。かれはピセートル精神病院の、自分を王と思いつて死んだ。かれはピセートル精神病院の、自分を王と思いつて死んだ患者の話を「ピセートルの王」でえがいたほか、『東方の旅』では二重身幻覚をえがいたが、『オーレリア』では自身の病状や幻覚、あるいは夢を記録、分析した。そこでは彼が崇拜する女神に対して罪をおかしたために宇宙の秩序によって罰せられているという被害妄想がえがかれる。

フロベールの狂気

フロベールは癲癇だったという。彼が一六歳のときに書いた「狂人の手記」一八三八ではつぎのような表現にでくわす。

「僕の心のうちは、カオス、途方もないざわめき、狂気であつた」⁽¹⁾。

あるいはこうも言う。「錯乱の時、なんと僕の思考は高くま
いあがつていたことか」。そしてかれは自嘲している。「哀れな
狂人よ！」彼には幻覚があつたとおもわれる。「それは恐怖の
あまり気違いになってしまうほどの、おそろしい幻想だつた」。
そしてこう言う。「僕は気が狂っていた」。

フロベールはもちろん「聖ジュリアン伝」で聖なる狂気をか
たっている。

モーパッサンの狂気

モーパッサンはブランシユ博士の精神病院で譫妄のうちに死
んだ⁽²⁾。梅毒が脳をおかしたためと診断されている⁽³⁾。しか
し彼には狂気についての偏執があり、多くの作品で狂気につ
てかたっている。そのなかには狂気というより異常体質のケー
スがあり、なにかみえないものがあるという不安のケースがあ

る。鏡をみてもなにもない、自分のすがたもみえないのだ。し
かしそれは、そのなにものが霧のようにかれをつつんでいる
からではないかと想像する。思い込みとしては、ありえないこ
とをおもいこんで妄想になるケースである。家具がひとりでに
うごいていったというのも錯覚で、それをほこんでいる人間が
いたのだろう。そういったものを「狂気」というのは正確では
なさそうだ⁽⁴⁾。むしろ「ペロムさんの虫」で、耳のなかに虫
がはいりこんで、脳をかじっているとおもいこんでいる男の話
があり、ありえない話ながら、いたい、いたいとさけんている。
思い込みについては妄想としてもいいが、現実には虫がはいりこ
んでガサガサしていることはありそうで、事実、ここではノミ
が一匹耳にはいりこんでいたことになっている。実際にそれが
ノミでそれがとりのぞかれたら症状がなくなつたなら妄想では
なくなるが、最初はだれもが、なにかわけのわからないことを
言っていたいと言っているとおもっていたのである。妄
想ではなかったが、妄想とみんなに思われていたケースである。
なお訳では「ペロムとっさんのけだもの」となっているが、原
題の *Bees* はこのばあい「虫」である。高等法院の裁判長のば
あいは⁽⁵⁾、殺すことの快感をおさえきれず、犯罪に犯罪をか
さねていた法官の話で、世間では彼の行状をすれば啞然として
狂っているというだろう。また理性の制御がきかなくなつて、
本能のままに行動していたとすれば、それも「狂気」とよばれ

てもしかたがない。「おなじような狂人がそれと気づかれずにおびただしく世の中に生存している」とこの小説はしめくくる。みんな狂っている。そしてそしらぬふりをしている。これを「狂人」とはすこしちがうのではないかと思うのは、みんなが狂っているからだ。そのばあいの「狂気」とは「有罪」ということであり、社会秩序の壊乱である。が、「正常」があり「狂気」があるとすれば、これはやはり「狂気」である。

つぎに作品のなかで異常心理をえがいたところを検討してみ

ロックの娘 La petite Roque, 1885 初冊 Gil Blas

ロックの娘が森で強姦され絞殺された。下手人は村長である。村長はとりしらべに平然とたちあつていた。容疑者が何人かあがつたが、いずれも証拠不十分で釈放された。そのころから、村長には殺した娘の亡霊があらわれるようになった。「どうにもならない陶酔状態、理性をふつとはした、一種の官能の嵐のなかで、この犯罪をおかした」。「しよつちゆう彼はあの恐ろしい場面を思い起こさずにはいられなかった」。「それは彼の心の中をさまよひ、彼の周りをぐるぐるまわつていて、おりあらば再現しようと、たえず機会をねらつてるように思われた」。「やみは恐怖で満ち満ちているように思われた」。カーテンがう

ごいた。なにものかがいる。窓のむこうに白いはだかの死体がみえる。ロックの娘がたちあがり、こちらへやってくる。

しかし彼によれば、彼はくるつてはいなかった。「これは亡霊などというものではないこと、死人が化けて出るなどということはありえないこと、彼の病的な魂、つまり、ただ一つの観念、忘れがたき記憶にとりつかれた彼の魂だけが、彼の苦悶の唯一の原因であり、死んだ娘の霊を呼び出す唯一のものであることはよくわかつていた」。亡霊ではないというものの、それはまさに亡霊の妄想がとりついたのである。悔恨の情であるかもしれない。悔恨でもそれは「病者のこのころを見透かして、批判したり、皮肉・非難・叱責する」(山下)妄想であろう。

「狂おしい絶望感に悩まされながら、我が家にもどつた彼はピストルをにぎつた」。彼はすべてを告白する手紙を書いて投函したあと、一度それをとりもどそうとしたが、郵便配達にこゝとわれ、絶望のあまり塔にのぼつて、そこから身をなげた。無罪なものを不当にさばいて司法による殺人をおかさせるわけにはいかない。自分の罪はおおやけにして、みずから断罪しなければならぬ。良心の呵責である。原因のない罪障感から自責の念にせめたてられる妄想患者もいるが、この村長は原因のあきらかな罪障感にせめたてられたのだ。原因がはつきりしているのだから妄想ではないのだろうか。しかし一人暮らして、相談するあいてもなかった。罪障感がどんどんふくらんでいっ

たのである。

殺害の欲求におされて殺人をおかしていた高等法貧の裁判長は八二歳でおそらく老衰のために死んだ。そのあとで、事実を告白する手記が発見された。「ロツクの娘」の村長は亡霊ないしは悔恨にとりつかれて告白して死んだ。裁判長には悔恨はなかったが、村長には悔恨というより、犯罪の記憶がとりついていた。犯罪自体は「官能の嵐」におそわれて、なかば無意識のうちにおこなった。それはだれでも同じような状況でおかしてしまうかもしれないことだった。殺す気はなかったが、強姦をしたあと、少女が泣き止まないで腹をたてて首をしめたのだ。殺すより、だまらせようとしたのである。そのあとで、亡霊にくるしめられた。そして譫妄にとりつかれて自殺した。

エルメ夫人 Madame Hermet 1887 Gil Bias

「ぼくは狂人に興味をひかれる。彼らは奇怪な夢のうずまく神秘の国に、不可解な痴呆の雲の中に生きている」。という書き出しではじまるこの物語は、なにこともないのに、天然痘におかされて顔があばただらけになったとおもいこむ女の「狂気」を物語る。

「夢まぼろしが常のこととなり、超自然が日常の世界となる」。「深い谷間をのぞきこむような気がする」。これはかれが観察

した狂人の話だ。患者はうつくしくまだ若い夫人だ。彼が病室にゆくと彼女は

「ちいさな手鏡に写る自分の顔を一心にながめていた」。

彼女は息子を天然痘でなくしている。その末期に彼女は息子にあうことを拒否した。天然痘がうつるのをおそれたのである。息子はなんども懇願した。彼女はがんとして病室にいこうとはしなかった。そして息子は母親に別れを告げることもできず死んだ。

「その翌日、彼女は発狂した」。その狂気は鏡をみて、顔にぼつぼつができていとおもいこむことだった。実際には彼女の肌はすべすべで、すこしも発疹もそのあとでもみられない。が鏡をみつめる彼女には、確実に天然痘があらわれているのだ。これは天然痘の感染を恐れて瀕死の息子を見舞ってやらなかった罪障感がみさせる幻覚である。自分に天然痘の発疹があらわれたとおもいこむだけの幻覚で、人を害するものではないが、幻覚であり、妄想であることには違いがない。

ル・オルフ Le Horla, 1887⁽⁶⁾

セーヌ川に面した館から川をみているとブラジルの旗をつけた真っ白の三本マストの客船が目まえをとおっていった。そのときは瀟洒な船がとおるとだけおもっていたが、しばらくす

ると新聞で、ブラジルで奇病が発生し、大流行しているという報道を読んだ。それいらいどうも体の具合がわるい感じで、もしかしたらブラジルの奇病がそこからやってきた船のつてきて、彼の館にとびうつたのではないかとおもいはじめた。しだいに「かもしれない」が「にちがいない」になってゆき、奇病が人格化して、異星人のような存在ではないかと想像されるようになる。これも想像がしだいに確信にかわってゆくケースだ。なにしろだれかがいるのだ。目にはみえないが、なにかがいる。夜、ねるまえに枕元に水差しとコップをおいておくと、だれが飲むのか水がなくなっている。本をよんでいると頁が自然にめくられて、だれかが肩越しにそれをよんでいるように思える。鏡をみると霧がかかったようになにもみえないが、やがて、霧がきえると彼の姿がみえる。彼と鏡のあいだにたちはだかつた霧は「ル・オルラ」にちがいない。彼はそう名付けた異星人をとどこめて、やきころすために館に火をはなつ。そのとき、館に寝泊まりしている使用人たちがいたことはすっかりわすれていた。そしていまかれは精神病院にとどこもっている。そこにはいないと、「ル・オルラ」にとりつかれてしまふのだ。いや、精神病院にいても夢魔がとりついている。

「夢魔がおれにさわりベッドに上がり、おれの胸にまたがり、おれの首を両手で抱いて、絞めて、力一杯しめころそうとする」。それはどこからくるものだろうか。

「苦悩からくる一種不思議な戦慄」。いかなる苦悩だろうか。「一方のかかとこまのようにまわりはじめた。木々がおどっている。地面が揺れている。

おれは気がくるつたのか？
水差しはからだだった」。

「俺は夢遊病者だった。あの不思議な二重生活を営んでいたのだ。一つの不思議な、不可解な、目に見えぬ存在があつて、それが時あつて、われわれの精神力の鈍るのを見計らい、われわれのとらわれの肉体を、我々以上に、自由自在に操縦する」。もともとはなんともしれない憂鬱であり、不安である。自分が自分でなくなる不安である。だれかに精神を支配されていると感ずる。「見えない敵」がつきまとうという妄想である。その敵をころすために館に火をつけた。そして使用人たちを焼き殺した。彼につきまとうていた「だれか」というのほもしかすると使用人であつたかもしれない。だれかがいる、だれかが彼をみはっている。だれかがかれのかわりに行動する。その思い込みは、そうとは言っていないし、意識もしていないが、使用人にとりかこまれた館の中の生活からくるのかもしれない。「だれか」と言えば、下男であり、女中である。それにおもいたらないのは、だれかにつきまとうれれているという譫妄が嵩じて、使用人がいることを「忘れて」いたからである。

たれぞしる Qui sait ? 1890, l'Echo de Paris

音楽会へいって夜遅く家へかえつてくると、家から家具という家具が脱走しているのを目撃する。それをほこんでいる人はみえない。家具がひとりで動き出しているのである。恐怖にかられた主人公はその家にとどまつていることができず旅にでた。そしてルアンのある街並みがあるしていると、とある古道具屋のまえに、かれの見覚えのある家具がならんでいるのを見た。翌日、警察とともにそこへいってみると店はしまつていた。やがて、留守宅から家具がもどつてきたという連絡があつた。もちろん古道具屋が、商品に「あし」がついたことに気づいて、もとにもどしたのだ。しかし語り手は家具がひとりでうごいたものと確信している。そんなことはないというのは簡単だが、語り手がみていたときは、家具はひとりでうごいていた。それを確信しているのである。家具ががたがたとうごきだすというのはポルターガイスト現象で、幻想文学ではよくある話である。その家具がいつせいになくなるというのも、どろぼうが姿をみられないようにして家具をはこびだしたのにちがいない。しかし、語り手はそのような合理的解釈をしりぞける。家具がかってにうごいたのだ。もしそれがありえないのであれば、たしかにそれを見た彼が気がくるつているのである。結局、

かれも精神病院にはいらなければならぬ。自分の支配下にあるはずの家財が彼の意思に反して勝手な行動をするようにおもう。自分以外のものの意思に自分をつつみこむものがたつている。自分が自分でなくなる恐怖がそだつてくる。

髪 La Chevelure, 1884, Gil Blas

家具が生きているかのように動き出すというのは「たれぞしる」だけではない。「髪」の主人公は古道具屋でとある机をみて不思議に心をうごかされる、まるで机がかれによびかけるよふと引き出しのなかにもう一つの引き出しがかくれていることに気が付いて、それをあけてみる。するとそこにはうつくしい女の髪が隠してあつた。それを手にとるとそれはまるで命あるもののように動いた。

髪は毛はだらりとしたにたれて、金色の波が床にまでひろがった。まるで彗星の燃える尾のように、厚くて軽く、しなやかでさらさらひかっていた。

「髪の毛はぼくの指の上を流れ、奇妙な愛撫で、死んだ女の愛撫で、ほくの皮膚をくすぐった」。

死者はよみがえってくる。「彼女はよみがえてきた。ぼくは彼女を見、だきしめ、じぶんのものにした」。

かれはその髪をふところにいれてどこへゆくのものにも一緒にいった。そしてどこであつてもその髪をとりだして愛撫し、接吻するのだった。それを変態性欲者として、一種の狂人として逮捕拘禁したのは、治安当局のゆきすぎだろうが、語り手はそのことにはさして異議をもうしたててはいない。彼のあいする髪と一緒にいられるかぎりは満足なのだ。医師の診断では「死体愛玩の色情狂」で「ときどきひどい凶暴性の発作をおこす」というのだが、髪をとりあげると狂暴になるだけで、それ以外のときはおとなしく髪を愛撫しているだけだろう。モーパッサンはしかしこれを「狂気」とよんでいる。「彼の狂気は、固定観念は、彼の頭に巣くつて執念深く、ひっきりなしに彼を苦しめ、責めさいなんだ」というのである。髪を愛撫しているだけではなく、その行為を自然に反する行為と判断して、自分で自分を批判しているのである。性愛でも許された種類のもの、許された範囲のものがあつて、それを逸脱したものは「罪」であると思う。自分が思うだけではなく、医師もそう判断して「色情狂」という。じつさいには「合法的」（モーパッサンの用語である）性愛と「非合法」なそれ、そして「反自然」のそれがあり、髪への偏愛は「反自然」とみなされたのであろう。そこにはさらに髪という体の一部をもつて全体を現出させる幻想があり、髪をだきしめながら、その持ち主と性愛をおこなっているのだと確信するまでにいたるところがあつたかもしれない。そしてそ

の「確信」は、妄想である以上に、有罪観をもたらしつたのである。どうしてもひきつけられる。しかしそんなことをしてはいけけないのだという罪障感がつのつてくるのだろう。

このあと、いくつかの短編のなかで、「狂気」ということばがつかわれているところをみてみる。

狂女 *la Folle, 1882, le Gaulois*

父親と夫と息子をほとんど同時に失くした女が悲しみのあまり気がへんになつて、寝たきりになつた。プロシヤ兵がその家を接収にやつてきて、立ち退きを命じたが、女はたちあがろうともしなかつた。結局、ベッドに寝たまま、マットレスごとこばれて、どこかへすてられてしまつたが、これもモーパッサンにとつては「狂人」だつた。ねたきりになり、正当な判断ができなくなつていた痴呆のすすんだ状態だろうが、野原にすてられても、ふつうなら、起き上がつて自分の家へもどつてくるだろう。それができない状態だつたとみられる。

みなづい *L'orphelin, 1883, le Gaulois*

主人公はとなりに住んでいた女の子を養子にしていたが、

こどもはおおきくなると自分のなかにとじこもって、一言も口をきかなくなつた。

「こうして、彼女が二時間も三時間も向かい合つていようものなら、彼女は自分が発狂するのではないかと思つた。いまにも逃げだして、田舎に落ち延びたい衝動にかられた。それも、ただこの無言の、永久の差し向かいをのがれるためだつた。それにまた、べつにその兆候があるわけではないが、ただなんとなく予感のするばくぜんとした危険をのがれたくもあつた」。

「不安で夜もぬむれなくなつた。ぞつとするような恐怖におそわれ、ものすごい悪夢の連続だつた。恐怖のあまり、部屋の中に閉じこもり、門にはかんぬきをさした」。「自分がなにかの不幸に、恐るべき不幸に脅迫されていることは確かだつた」。

恐怖は現実のものとなつた。町へでかけて、夜一〇時ごろもどつてきたきり、消息がたえた。さがしてみると道端で首をきられて死んでいた。みなしごにはアリバイがあつたが、一一時まで喫茶店にいたのを目撃されていたというのである。そのあと、町からかえつてくる養母をまぢかまえていて殺した可能性はなくはない。ただ、捜査では、証拠不十分で釈放された。そのみなしごがその後は人々にみとめられて、郡長にまでなつたと物語はしめくくつていゝが、作者はもちろん、下手人がうまくたちまわつて郡長にまでなりおおせたといいたいのだろう。そこにあるのは、みなしご、捨て子のコンプレックスにちがひ

ない。「親殺し」でも捨てた子にあいにいつた両親がみなしごにころされる話を書いている。「捨てた子」という作品もある。いづれも事情があつて捨てた子に、その子がおおきくなつてからあいにゆく話である。「オリブ畑」は、捨てた女の子に殺される話である。モーパッサン自身には、捨てられ、拾われた子供であるという「家系幻想」はなかつたとおもわれるが、ミロメニルの城館でうまれたというのは、作り話だといふ話もある（ルネ・デュメニル『ギイ・ド・モーパッサン』）⁽⁷⁾。家系をたどると母親がノイローゼ気味だつたといふことと、弟が発狂して精神病院で死んだといふ事実がある。実際の父親や祖父父母などはごくふつうのひとたちだつたようだが、モーパッサンは自分だけか高貴なひとの落胤で、その「父親」の血統で狂気の気味があるといふ妄想があつたのかもしれない。

ドニ Denis, 1883, Le Gaulois

忠実な下男があるとき、気が狂つて主人を刺し殺そうとした事件で、弁護士は、精神錯乱のせいと主張した。

「二つの犯罪をそれぞれ互いに関連させながら、狂気のせいで主張した」。「優秀な療養所で数か月間治療すればかならずなおるはずであるこの精神錯乱」ドニは二〇年にわたつて忠実に主人につかえていた下男だつた。がある夜、包丁をもつて、

寝ている主人の部屋へおしり、主人を八カ所もさした。しかしどうやら頭がおかしくなっていたらしい。主人に思いがけない金はいって来たのを知って、それを奪おうとしたのだともされるが、二〇数年、忠実につかえてきた下男のころのなかには、抑圧された願望や反抗がそだっていたのかもしれない。優等生がとつじょ両親や教師に歯向かったり、万引きをしたりするのとおなじく、適当に発散されずにおさえられてきた欲望は、主人の警戒なくらしを日常目のあたりにしているだけに、ふくれあがって、ついに爆発したのかもしれない。瞬間的に感情抑制ができなくなつたのであろう。

ミス・ハリエット Miss Harriet, 1883, Le Gaulois

ノルマンディの海岸に滞在していたイギリス人の女性が井戸に身をなげて自殺した。同宿の画家に惚れて、しかし相手にされなかったためとおもわれるが、もともと、常軌を逸していた女だったのかもしれない。おもいつめるタイプだろう。一方的に恋愛感情をつのらせて、相手のことも周囲の目もみえなくなつてしまい、しかるべき反対給付がないことに絶望して自殺するのである。

「彼女の眼には一種の狂気が宿っていました。神秘的な、激しい狂気なんです」。

恐怖 La Peur 1882, Le Gaulois

この題名の作品はふたつあるが、最初に発表されたもののほうである。語り手は山番のいえにとまることになった。しかし家のなかにはおそろしい緊張がはりつめていた。二年前そこで殺人がおかされ、そのときころされたものの亡霊が復讐にもどつてくるのではないかと家中のものが不安におびえていて、犬まで、狂つたように吠えだすのだ。

「この動物の挙動を見ると、わたしたちは狂人になりそうでした」

「恐怖はある種のアブノーマルな場合、つまり、漠然とした危険に直面して、ある神秘力を感じたばあいなどにおこるものです。真の恐怖とは、むかし感じたことのある、幻覚的な恐怖の追想といったふうのものです」。

あいつか Lui? 1883, Gil Blas

ひとり部屋にいるのがこわくなった男が、恐怖からのがれるために結婚しようとしている。「気でもくるったんじゃないかって? あるいは、そうかもしれん」。

「ぼくは、自分自身がこわいんだ!」恐怖に襲われてこころ

が物狂おしくひきつけてくるのがこわいんだ。不可解な恐怖には、何とも言えぬ嫌な感じがする。「壁がこわい、家具がこわい、見慣れた品物がこわい、そいつらが、なにか動物のように生きてみえるのだ。そして、とりわけこわいのは、自分の思想や理性が、ひどく混乱し、一種神秘なえたいのしれぬ苦悩に乱され、かきちらされて、自分から逸しさろうとする

「はじめは、ばくとした不安が、心のうちに忍び入って、肌がぞつと寒気だつのおほえる。あたりをみまわすが、なにもみえない！ なにか後ろにいそうな気がしてふりかえってみる。なんにもいない。ふと前をみると、だれだかしらないが、僕の肘掛椅子に腰かけて、こちらに背を向けたままで、足をあたためている。」「ときどきぎよつとして、うしろをふりかえる。部屋のすみずみにわだかまるもの影にも、おびえていた」。幻聴はないが、幻視、あるいは、だれかがそこにいると感じる幻覚である。

胎児 *l'enfant, 1883, Gil Bias*

その女は「偶然の運命で情熱的につくられた」女だった。「官能をおさえきれなかった」、亭主につきつぎに死なれたあと、官能をおさえきれずに庭師とまじわって妊娠した。そして墮胎しようとして、肉切り包丁で腹をさし、胎児をひきだして、血

まみれになって死んだ。

「官能は幾晩もひとをなやませ、そのために膚はかつかとほてり、心臓はや銅のように鳴り、気もくるわんばかりの幻想で精神を責めさいなまれます」。

「土地では、彼女のことを気遣いだといっていました」。

わるぶやけ *La Farce, 1883, Gil Bias*

主人公はわかいとき、きらっていた某夫人をおどろかせてやろうとして、夫人の尿瓶にリン化カルシウムをいれておいた。夫人がそのうえにまたがって用をたすと、とつぜん尿瓶が爆発した。

「彼女は恐怖のために狂気のようになり」気絶して倒れた。人は恐怖のあまり気が狂うのである。

ボーイ、もう一杯 *Gargon, un bock! 1884, Gil Bias*

カフェにはいつてビールをのみながら、少年時代のことを回想している。両親が金のことから喧嘩になり、父親が母親を殴り倒した場面を彼は目撃したのである。これもひとつの「原光景」であろう。またそこから父親否認の感情がでてくるだろう。

「人々が超自然の事物や、言語に絶する破局や、償い難い際涯を前にしたときに感ずるように、魂がひっくりかえるのをおぼえた。少年の僕の頭は、錯乱して狂ったようになった」。

散歩 Promenade, 1884, Gil Blas

ルラ氏は食事のあと、ブローニユの森へ散歩にいった。そこにはおおぜいの恋人たちがいた。ルラ氏はそれまでついぞ恋というものをしたことがなかった。それをおもって彼は首をつつたのだろうか。

「おそらくは、発作的に気がくるったのであろうか」。

ざんげ la Confession, 1884, le Figaro

「それはわたしの魂をくいやぶった。そしてわたしは物凄いく苦悩と同時に、鋭くかみつかれる心身のほんとうの痛みを感じていた。」「恐るべき怒りが増大し、わたしののどをしめつけた。嘔気に近いほどの憤怒だった。狂気にちかいほどの！ そうだ、たしかに、あの晩、私は気がくるっていた！」

ベルト Berthe, 1884, le Figaro

おしで、白痴の娘が結婚した。夫はめったに家にかえってこなかった。帰ってこない夫をまちながら彼女は気がくるった。「こうして彼女は気違いになった。この白痴は気違いになった」。

隠者の話 L'ermitte, 1886, Gil Blas

ある独身男がビアホルのウエートレスを口説いて、その女の部屋へゆく。そして暖炉の上においてあった写真をなげなく手にとった。そこには彼自身の若い時の姿がうつっていた。女にきくと、母親が死にぎわにおまえのお父さんだといってわたしにくれたものだと言う。女は主人公がわかいときに手をつけた女が生んだ娘だった。主人公は実の娘と床をともしたのだ。彼は世をはかんで出家して山のなかに庵をむすんだ。その隠者の述懐である。

「わたしはあぶなく川へ身をなげそうになりました。まるで気が違ったようでした」。

ポールの恋人 *La Femme de Paul, 1881,*

(*La Maison Terrier*)

ポールは恋人をつれて川べりにあそびにきた。しかし、恋人は女友達と一緒に姿をけしてしまった。ポールは彼女を呼んだが答えない。それだけのことだが、彼は自殺した。

「河が目の前にあった。彼には自分のしようとしていることがわかっただろうか？ 彼は気がくるっているのだ」。

夢 *Rêves, 1882, le Gaulois*

モーパッサンはアヘンはやらなかったが、エーテルは吸っていた。以下はエーテル吸引のさいの幻覚である(8)。

「一種の魂のまひ状態、うっとりとした幸福感が感じられ、まもなく、胸のなかにあった不思議な、快い空虚感がしだいにひろまり、手足にまで及び、この手足が今度は軽くなり、まるで肉と骨とがとけてしまつて、ただ皮膚だけが、生きることの楽しさと、しあわせのなかに横たわっている楽しさを感じさせるために必要な皮膚だけがのこつているように思われるように軽くなりました」。

奇案 *Une ruse, 1882, Gil Blas*

夫の留守中に男をひきいれたところが、その男が急に死んでしまった。女はとりみだして、気がくるつたようになった。

「彼女は恐ろしいまでに青ざめ、気の狂つた人のように顔はけいれんし、両手は震えていました。二度とも彼女は何か言おうとしましたが、ひとつも口から発しえませんでした」。

ジヨカスト氏 *M. Jocaste, 1883, Gil Blas*

これも自分の娘とまじわつて、結局、娘と結婚した男の話である。

「彼は呆然となり、何がなんだかわからなくなり、頭が変になつてしまいました。

わたしたちは、ある瞬間にはきちがいになるのです」。

聖アントワーヌ *Saint Antoine 1883 Gil Blas*

普仏戦争のさい、プロシヤ軍に接収された家のもちぬしが、家にむかえられたプロシヤ兵をころした話である。似た話がなんどかかたられる。息子をプロシヤ兵に殺された老婆が、家に

とめていたプロシヤ兵三名をやきころした話もある。每晚、でかけてはプロシヤ兵をころしていたミロン爺さんの話もある。

「老人はその人影がだれだかわかると気の狂った野獣のようにたけりたつた。年取つた百姓は、たてつづけに腹やみぞおちやのどに突き立て、まるで気が狂つたように、相手の全身をずぶずぶ突き刺して、穴をあけた」。

マドモアゼル・ロロット *Mademoiselle Cocotte,*
1883, *Gil Blas*

精神病院をたずねたときの話だ。「ぼくたちが氣違い病院をしようとしたとき、庭のすみで、一人のやせた大男が、想像の犬を呼ぶまねをしながら、それをいつまでも繰り返しているのが目にとまつた。

自分の犬を溺れ死にさせたんで、それがもとで氣違ひになつたのです」。

主人に命じられて、犬を溺れさせたあとで、そこから何キロもはなれたところで水浴をしていると、溺死した犬の死骸がうかんでいた。それが、彼が死なせた犬だつた。

「彼は一声おそろしい叫び声を発すると、なおもわめきつづけながら、土手にむかつて懸命に泳ぎ始めた。そして、地面にあがるやいやなや、真裸のまま、無我夢中でのつばらを逃げた。

狂つたのだ！」以来、精神病院に收容されて、見えない犬にむかつて、名前をよぶのである。

「ル・オルラ」の描く狂気をもういちど、日記に即してみてみよう。はじめは「うららかな日」で氣持ちがいい。四日後にしかし、すこし熱があるという。

五月八日——なんとうらかな日だろう

三本マストのブラジルの船が来た。純白に塗られた、実に瀟洒たる船で、光り輝いていた。

五月二二日——二三日来、すこし熱がある

いったいどこからあの潜勢力がやってきて、我々の幸福を失意に変じ、われわれの自負を悲嘆にかえてしまうのだろうか？ 膚をざわざわさせる悪寒がおれの神経を刺激し、精神を陰氣にしたのであろうか？

およそ変わりやすい四圍の事物の色が、おれの目から身内に入つてきて、おれの思念をかく乱したのであろうか。

この「目に見えぬもの」の神秘が、いかに深遠であることよ。(ここで「目に見えぬもの」がでてくる。それがただの気分ではなく、人格化してくる)。

五月一六日——断然、おれは病氣だ！

五月二五日

おれはこわいのだ。

夢魔がおれをだきしめる。

だれかが、おれにさわり、ベッドに上がり、おれの胸にまたがり、おれの首を両手で抱いて、絞めて、絞殺そうとする

おれは声をだそうとする。しかしそれができない。動こうとする。しかしそれもできない。

(この「夢魔」は、ノデイエの「スマラ」を思わせる。)

六月二日

突然、おれはつけられているような気がしてきた。

七月六日

おれは気が狂いそうだ。

七月一〇日

断然、おれは狂人だ。

(狂人か? いや、狂つてはいない。いや、やっぱり狂つている。自分自身の妄想について逡巡する。ここでは、「実験」をおこなっている。その結果は、「見えないもの」がいることを確認させるものであるはずながら、ここでは、「おれは狂人だ」と断定している。じつさいに自分がぐるぐるしているというのではなく、「実験」の結果が彼の認識と理性の根底をくつがえすのだ。それを「狂っている」と言っている。)

七月六日に寝る前、葡萄酒と、牛乳と水と、パンと、イチゴをテーブルの上においてみた。

その水を全部と、牛乳をすこし、だれかがのんでしまった。

七月七日に同じ実験を繰り返した。

七月一二日

パリ、このごろ、俺はやっぱり正気を失っていたのだ。本物の夢遊病者でないとしても、神経衰弱的な妄想に翻弄されていたのに違いないのだ。

(かれは「見えないもの」の存在にたえきれなくなつて、パリへ逃亡する。すると一時的には「見えないもの」の支配をのがれられる。)

八月四日

戸棚にしまつてあるコップを夜中に、だれかがこわすのだ。(ポルターガイスト現象だろう。だれも手をつけないのに食器がゆれてわれる。あるいは「たれぞしる」のように家具がひとりでにうごきます。)

八月六日

おれはみたんだ。バラが三輪、見事な花をつけていた。そのうちの輪の花茎が見えぬ手でねじられでもしたようにたわむのを、ついで、その同じ手で、つもとられでもしたように、ぼきりとおれるのを。その花はひとりりで高くあがつていった。

(バラの茎はなかなかおれない。素手で摘み取ることはむずかしい。にもかかわらず、ポコツときりとられた。それが空中をただよつてきた。だれかの見えない手が缺でつみとつたのだ。であれば今度はコップがひとりりで宙にういて、なかの水がだ

れかの胃のなかにはいつてゆくだろう。つぎに描かれた本のページが自然にめくられるというのはそれほどふしぎではない。風がふけばページはめくられるだろう。見えないものは霧のようなもので、それが鏡の前にたちはだかると、彼の姿が鏡にうつらなくなるといふのも、ちよつとした錯視ともおもわれる。鏡は正面からでなければ像をむすばない。しかし、薔薇が自然にきりとられて宙をとぶといふことはありえない。このばあいは、だれかみえないものがあると結論せざるをえないのは当然かも知れない。

八月七日

自分の理性に対する疑念がしきりにわいてきた。

一度彼らの思念が彼らの持つている狂気の暗礁につきあたつたが最後、それはみじんに粉碎され、散乱し、いわゆる「精神錯乱」といふ、かの怒涛と濃霧と、突風に封ぜられた。荒れ狂う大海にしずんでしまうのである。

(ここで「精神錯乱」といふことばがでる。正確な自己診断だろう)。

いまだ世にいられていない神経障害がおれの脳髓の中におこつたのちがいない。

この神経障害が、おれの精神の中に、おれの観念と秩序と推理の中に、一つの深い亀裂を生ぜしめたに相違ない。

ある種の非現実的な幻覚を統御する機能が、今、おれの中で

まひしている。

八月一四日——おれはもうだめだ。何者かが、おれの心についていて、おれの心を支配している。なにものかが、おれのあらゆる行為を、おれのあらゆる動作を、おれのあらゆる思考を命令している。

もはや、おれはあつてなきもののごとく、自分のなすあらゆる行動を、戦々恐々として傍観している、制圧された見物人にすぎないのだ。

八月一五日

いよいよ世界の終わりが近づいたのだろうか。

さては、「目にみえぬもの」どもは存在しおるのか。

八月一七日

エレマン・エレストウスの(精神病理学の)本をよむ。

机の上に開いてあつた書物のページが、突然、ひとりでめくられたように思えた。おれは見た。まるでゆびでめくるように次のページがひとりでに上がって、先のページの上におちるのを。

八月一九日

「科学評論」を読んだ

「中世紀のころ、ヨーロッパ人を襲つた伝染性の精神錯乱に酷似せる狂気——一種の狂気の伝染病が目下サンパウロ州に猖獗を極めてゐる」。

八月一九日

おれはあいつをみたぞ。ものを描いているふりをしていた。

おれの姿は鏡にうつっていない。「あいつ」のすがたもみえない。しかし、そこにそれがいるという妄想が彼の視覚に覆いをかけている。

そのうち突然、霧のなかに、鏡の底の霧のなかに、さながら水面をとおしてみるように、おれの姿がもうろうと見え始めた。

九月一〇日

突然おれは、あいつがそこにいるのをかんじた。(彼は「そいつ」を鍵で部屋にとじこめ、家に火をはなつた)。

その時俺は、恐ろしさに気も狂い、いちもくさんに、村のほうへ駆け出した。あいつは死ななかつた。おれが、このおれが死ななければならぬのだ。

(オルラは彼のあとをおって精神病院までやってくるだろう。

内部の精神錯乱であれば、それを外的な火災などでほろぼすことができないのはいうまでもない。モーパッサンは結局、狂気の魔にとらえられてブランシユ病院で死ぬ)。

この一連の記録であきらかなのは、なにもものかにつきまとわれているという被害妄想がだんだんと悪化していった、最初は「気分」だったものが最後は「確信」にかわっている。そして彼にはその「見えない存在」との闘いしか意識にのぼらなくなる。館に火をつけたときは、その館に寝泊まりしている使用人

たちのことはすこしもかんがえなかつた。妄想のとりこになつて、周囲がみえなくなつていたので。

モーパッサンは家系幻想をおもわせるみなしごの話をよく書いた。捨てられた子のところへ、捨てた両親がやってくる。あるいは捨てられた子がおおきくなって、父親のところへやってくる。はじめは感激のうちにだきあうかとおもわれるが、ふとしたことから意見が対立し、みなしごはかつとなつて「狂気」のうちに実の親をころす⁽¹⁰⁾。あるいは町で拾つた女が実の娘であることを知つて、自殺をこころみる。そのような衝動的な殺人や自殺をモーパッサンはおおく描いた。しかし、弟エルヴェの発狂とその死をみていたかれは、狂つた殺人者が他人事とは思われなかつた。

モーパッサンの時代には狂気をテーマにした作品がいくつも書かれた。そのひとつが「狼憑き」の事例である。

エルクマン＝シャトリアン、Erckmann-Chatrian

(1822-1899, 1826-1890)

「狼のフー」 Hugues le loup, 1858

アルザスの作家エルクマンとシャトリアンは合作で「国民文学」を書いたが、この作品はとある城主の狂気を描いている^[1]。

黒森の岩山のいただきに城がそびえている。その主は毎年、降誕祭がちかづくときと狼憑きの症状を呈し、夜中にまどをあけて狼のように遠吠えをする。森のかなたではそれにこたえる狼の遠吠えがきこえる。城主の「狂気」をなおすように呼ばれた医師は城の古文書をあたって、この一族の病歴をさぐる。一族は「狼のフーゴ」とよばれて、代々、狼憑きの症状を呈するのだった。医師はこの狼憑きが遠吠えをするときにそれにこたえて遠吠えをしている人物をつきとめる。そのあたりでは「黒ベスト」とよばれている老女で、降誕祭がちかづくところからともなくそのあたりにやってきて狼の遠吠えをするのだ。医師は彼女をいつつめて、彼女こそ、初代フーゴの後妻になった女の末であることをつきとめる。そして、それとともに初代のフーゴとそ

の後妻が、もとの妻をころして谷底になげすめたこともつきとめた。彼らとその末裔たちはそれぞれ、その罪のつくえないとして狼狂になり、毎年、その犯罪がおかされた降誕祭の日に狼の吠え声を合図にであって、原初の犯罪の様子をふたたび再現するのだった。

世紀末の作家たち

ジャン・ロラン Jean Lorrain, 1855-1906

世紀末の作家ジャン・ロラン Jean Lorrain, はエーテルの幻覚や、神経症の病状を作品にとりあげた。

なかでも有名なのは「仮面の穴」『Trous de masque 1895』である。語り手はとある仮面舞踏会にまねかれたが、そこではだれひとりおどりもせず、じつとたたずんでいる。その異様な雰囲気は「理性が恐怖にとらえられるのを感じた。超自然がわたしをとりまいていた」。たまりかねた語り手はいならば仮面をひきあげてみた。するとそのなかはからっぽだった。そして鏡のまえへいって彼自身の仮面をひきあげてみた。それも空っぽだった。彼は恐怖のあまり大声をあげた。友人がかれをゆりおこしていた。「またエーテルをやったな」と友人は言った。

ジュールジュ・ロディンバック Georges Rodenbach,

1855-1898

鏡の友 Ami des miroirs (s.d)

はじめのうちは彼は鏡がすぎだといっただけだった。しかし鏡のコレクションなどをしはじめると次第に鏡にうつった鏡の世界、鏡の迷宮にとらえられるようになった。するととはや、鏡にうつった自分の姿がわからなくなり、鏡にむかってお辞儀をしたりするようになった。そして最終的には鏡の世界へはいりたいとおもうようになり、鏡に頭をぶちあてて死んだ。

フランツ・エリクス Franz Hellens, 1881-1972

法律にない犯罪 Un crime incodifié, 1919

作家である主人公はあるとき友人にあって、頭にかんだ作品の構想をかたる。するとしばらくして、その友人の名前で発表された本のなかに、彼がかたったとおりの作品が発表されていた。以来、彼の頭にかんだ構想はすべてその友人の名前で発表され、彼のほうは、作品をおもいつくだけで、一行もかけなくなつた。それをしかし実証することはできない。友人某の作品を剽窃だとうつたえても狂人あつかいされるだけだろう。

事実、かれは頭のなかの作品をぬすみとられるという「架空」の被害妄想の患者なのだ。それをきいた作者は精神科医を紹介する。(これは最近ではPCに入力していたデータが遠隔操作で盗み取られるという現実の恐怖にすりかわる)。

このあと、フランスではアルトー Antonin Artaud, 1896-1948 が統合失調症で死んだ。しかし、二〇世紀を代表する作品であるカミュの『異邦人』では、不条理な殺人は偶然のであいによる偶発事、あるいは「太陽のせい」とされ、狂気や錯乱のせいとはされない。裁判でも彼を精神病者とはしなかった。あるいはモリヤックの『テレーズ・デスケル』でも、夫のコップに毒をたらすテレーズの行為を「狂気」とはしていない。人間を異常な行為にかりたてるものとして、モーパッサンらは「狂気」という概念を援用し、二〇世紀はいわば超越者の意思をもつてくるのかもしれない。しかしそれも二〇世紀後半になってくると様相をかえてくる。「狂気」が治りうるものとされてくるのである。と同時に超越者の影がうすれてくる。モーパッサンにおける「狂気」はカミュの「太陽」とおなじ超越的なものであった。それがどちらも今日では絶対的な支配力をうしなつてきつつある。

注

- (1) ショシャナ・フェルマン「狂気と文学的事象」の土田知則訳による。以下同じ。
- (2) 村松定史によれば、「妄想の相手と話したり、時に凶暴性を発揮する症状が進行していった」。ラスナーによれば、ブランシュ博士はモーパッサンを診断して「口元はしまりがなくなって、正真正銘の狂人の相貌を呈している」といった。
- (3) 「晩年における彼の発狂は梅毒末期の進行麻痺による」と吉田城はみている。
- (4) 「神経症に苦しみ、自分が狂気に陥るかもしれないという危惧と予感が彼を神祕の世界の探求に向かわせた」。(吉田城)
- (5) *Un fou*、一八八五 はじめ、*le Gaijins* に発表される。
- (6) 初出は一八八六、*Gi Blas* だが、一八八七年に書き直されて単行本で発表される。
- (7) フェカンで生まれたが、「貴族にあこがれていた誇り高い母は、この土地の、ブルジョワの家を愛児の生家とするに忍びず、生後間もなくモーパッサンをミロメニルの城館に移し、そこで生まれたものとして役場に届け出た」(大塚幸男)ものとされる。
- (8) 「頭痛と疲労感、視力低下に加えて、エーテル吸引による幻覚、躁鬱、誇大妄想といった症状も発現する」。(吉田城)
- (9) 「オルラ」というのは語り手が考え出した属名で、固有名詞では

ない。犬、猫、猿とおなじようなものであり、異星人をさすともみられる。その異星人のうちの個々の存在をさすのではなく、アメリカ人、イギリス人といった種族全体をさすいいかただから定冠詞「ル」が必要である。作品のタイトルとしても「ル・オルラ」として冠詞をつける。

(10) *Le clamp d'oliviers*, 1890, *le Figaro* 「オリヴ畑」]

(11) 狼狂についてはデュマも書いている。 *Le meneur de loup*, 1857

参考文献

- 村松定史 モーパッサン 清水書院一九九六
- モーパッサン全集 一〜三 春陽堂 一九六五
- 大西忠雄解説 モーパッサンの生涯と作品 同上、第三卷
- ミッシェル・フーコー 狂気の歴史、古典主義時代における 新潮社、一九七五
- 山下格 精神医学ハンドブック 日本評論社、第五版、二〇〇四
- ロムプロオゾオ 天才論、改造社、一九三〇
- ホルスト・ガイヤー 狂気の文学、創元社一九七三
- ショシャナ・フェルマン 狂気と文学的事象、水声社、一九九三
- アルマン・ラスナー モーパッサンの生涯、新潮社一九七三
- フレデリック・グロ 創造と狂気、精神病理学的判断の歴史、法政大

吉田城 神経症者のいる文学、名古屋大学出版会一九九六

大塚幸男 流星の人モーパッサン、白水社、一九七四

Michel Desbrières, *La France fantastique*, 1900, Phebus, 1978

(しのだ ちわき／比較文学・神話学)